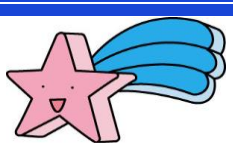
第 322 号　　生徒さん・ご家庭・先生をむすぶ新聞



とらいあんぐる

2017 年 9 月

一音会ミュージックスクール発行

「昔話」

人は、ある年齢以上になると、昔話が多くなるようです。古今東西、そうです。

自分が若い頃は、年配の人が昔話をするのが、不思議でした。「若い人が知らない話や、共感できない話を、わざわざするのはなぜだろう？」と思っていました。

しかし、自分が老いてくると、その気持ちが分かるようになってくるのです。「ああ、私も老いたのだな・・・」と、改めて感じます。

決して、「若い人に感心されたい」といった欲で話しているのではない、ということも、今ならよく分かります。

自分が体験したことを、それを知らない世代の人に、とにかく伝えておきたい、というのは、ある意味、自分が「生きて得たもの」を継がせたいという“本能”に近いものなのかもしれません。

自分の肉体が消えても、自分が体験したことを若い人が知っていてくれたら、生きた証になるでしょう。

もちろん、そこまで考えて昔話をしているわけではないのですが、無意識にそんな心の働きがあると、私は思っています。だから、昔話をしたい欲求

がわくのではないでしょうか。

そう、私が今、書いている「とらいあんぐる」がまさにそうです。

読み手の方々のほとんどは、私より若い方々です。

そうイメージしてしまうと、ついつい昔話になってしまうのです。

昔話は、「昔は良かった」という結論になりやすいものです。

今回は、そうじゃない話をします。

そもそも私は、「昔は良かった」と思うことが、あまりありません。むしろ、昔を思い返しては、「昔はイヤな時代だった」という結論に行きつくことの方が圧倒的に多いのです。

「今は良い時代になったなあ」と、幸せをかみしめます。

昔と今をくらべると、やはり人間の知恵と工夫が積み重ねられ、かけた時間と人々の努力の分だけ、良くなっていることの方が多いと、私は感じています。

単に、便利になった、豊かになった、という話ではありません。

「モノが豊かになって、そのかわり人の心が貧しくなった」といういい方は、よくされます。

否定はしません。でも、「その話はもういいよ」という気分になるのも本当です。

何度聞いても、「そうだよなあ」と納得する話も多いのですが、この話に拒絶反応があるということは、私の中に納得がいかない部分があるのだと思うのです。

いつも、「そうかなあ？」と思います。

昔の人が、今の人よりも善人だったとは、どうしてもどうしても、思えないのです。

私の子ども時代をふりかえりますと、おとなにイジワルをされた経験がたくさんあります。

書ききれないほど、あります。

私は、代々、商売をしている家に生まれた一人っ子でした。おとなとの接点が、普通より多い子どもだったとは思います。

それにしても、イジワルなおとなが、なんとたくさんいたことか！

私の個人的な経験にもとづいていますので、かたよっているかもしれません。いえ、きっとかたよっているのです。でも、書かせてください。

私は「とらいあんぐる」で、個人的なうらみを書かないと決めていました。けれども最近ひょんなことから、母が書いた「とらいあんぐる」の中で、たった１号ですが、母が個人的なうらみをはきだしているとしか思えない号の存在を知りました。以来、ここで、はきだしてしまいたい気持ちが抑えられません。

そんなわけで今回は、私のうらみのつまった昔話におつきあいいただきたいと思います。

むかしむかし、私の家の近所に、「第一マーケット」というマーケットがありました。

まずこの「マーケット」というものから、説明しなくてはなりません。

「マーケット」とは、「スーパーマーケット」の「マーケット」です。今でいうところのスーパーのはしりです。

私が子どもだった４０年前、スーパーは一般的ではありませんでした。

ちなみに椎名町駅前の「サミット」は、私が子どもの頃にできました。とんでもなく“ハイカラ”なものができたと、おとなも子どもも、興奮しました。スーパーは、知るかぎり「サミット」一軒だけでした。

スーパーがものめずらしい、そんな時代です。

では、どういうところで買い物をするかといえば、小売店です。八百屋さんでネギを買い、魚屋さんでアジを買い、パン屋さんで食パンを買うのです。

スーパーがない時代、買い物は、けっこうな時間と労力をかけなければいけない仕事でした。商店街があるといっても、お店はあちこちにあるので、一軒、一軒、出向いて、買い物をして、お金を払うのです。たいへんです。

私の家がよく活用していた「第一マーケット」は、そんな小売店の時代か

ら、スーパー全盛の時代へとうつりかわる、境目の時代にできた形態のお店でした。

いくつもの小売店が１つの建物の中に入っているのです。ゆるやかな仕切りがあり、いろいろなお店が入っています。それぞれが独立したお店ですので、会計は別々です。

とはいえ、１つの建物の中に、八百屋あり、魚屋あり、肉屋あり、乾物屋ありと、たいがいそろっているので、十分に便利でした。屋根があるので、雨が降っている日は、特にありがたいものでした。

「第一マーケット」は「サミット」よりもずっと、私の家から近かったので、毎日のように買い物をする場所でした。

もっぱら祖母が買い物をします。

しかし、高齢の祖母にとって、買い物は何よりも重労働でした。「アッちゃんが行ってきてあげる」と私がいうと、祖母は申し訳なさそうな顔をしながらも、「ありがとう。助かるわ」と、ほっとした表情を見せ、買い物を書いたメモとお財布を渡してくれました。小学校２年生ぐらいのことです。

ところが、です。ここが悲劇のはじまりです。

今でもよく思い出すのは、八百屋です。

小売店では、レジがありません。ならべてある品物をとりかこむようにお客さんが集まり、中央にいる八百屋さんのおじさんに、声をかけるのです。

「トマト、ちょうだい！」

「はいよ！」

「そのカボチャ、いくら？」

「100 円！」

そんな短いやり取りが、絶え間なく続きます。

おじさんは、野菜をビニール袋に入れ、お金のやり取りをしながら、次の注文をききます。

私も、やり取りの切れ目をねらって、大きな声を出します。

「キャベツください！」

ところが、おじさんに声は届きません。

声が小さかったのかと思って、さらに大きな声を出します。

「キャベツください！！」

おじさんは、こちらを見ようともしません。

何度も声をあげ続けるうちに、私は気がつきます。無視されている、と。

「そんな、まさか」と思います。知らないおじさんから、イジワルをされるおぼえはありません。

あまりにも後まわしにされ続けるので、別のお客さんが、「あの子の注文はいいの？」とおじさんにきいてくれたこともありました。おじさんは、「いいの、いいの」と、顔の前で手をふって、笑うのです。何がいいのか、さっぱり分かりません。

結局、長い時間、「キャベツ、キャベツ」とずっと叫び続けたのに、相手にしてもらえず、キャベツは買えませんでした。

もう、お店が閉まる時間になっていました。

そこに祖母がやってきました。私があまりに遅いので、心配した祖母が迎えにきたのです。

すると、八百屋のおじさんは、見知った祖母の顔をすばやく見つけ、明るくいいます。

「へい、奥さん、何にしやしょ！」

私一人の時とは、まるで人が違ったような対応です。

あぜんとする私の前で、祖母は注文をし、おじさんは愛想笑いをしながら、てきぱきと品物を袋に入れました。

祖母があらわれて２～３分のうちに買い物は終わり、祖母は私の手をひいて、マーケットを出ました。

これでは結局、祖母が買い物にきたのと同じです。

祖母を楽にさせたくて、がんばったことなのに、役に立てていない自分が悔しく、情けなく、私は声をたてずに泣いていました。

祖母は、やさしくいいます。

「泣くことないのよ。アッちゃんは恥ずかしがりやさんだからね、大きな

声が出せないかもしれないけれど、八百屋さんのおじさんのね、おめめを見て、はっきりいえばいいのよ。だいじょうぶよ。アッちゃんならできるわ」

ますます涙があふれます。

そして、私は心の中で叫びます。

何度もおじさんと目があったのに無視されたんだ！

何度も何度も、それこそ声をからして「キャベツ！」って叫んだのに無視されたんだ！

しかし、それを口に出して祖母に伝えることはできませんでした。真実を知れば、祖母は私に買い物を頼むことをやめ、自分で買い物に行ったでしょう。

それだけは、避けたかったのです。

「できるよ、アッちゃん、ひとりでできるよ！」

祖母が心配して迎えにこないように、私は手で涙をぬぐって、強くいいきります。

「おばあちゃんが顔を出したことで、さすがにあのおじさんもバツが悪かっただろう。私がおばあちゃんの孫だと分かって、もうイジワルできないだろう。もしかしたら、今、すごく反省しているんじゃないか」

そんなふうに考えた私が甘かったことは、翌日、思い知らされます。

また、無視されるのです。

永遠に後まわしにされます。おそらくお店が閉まるまで、いえ、もしかしたら閉まっても、おじさんは私を相手にしてくれないかもしれません。絶望的な気持ちになります。

あまり時間がかかると、心配した祖母が迎えにきてしまいます。

時間がない！　どうしよう！

焦りで、私の身体は小刻みにふるえ、あぶら汗が流れていました。涙がほおをつたいます。

それでもおじさんは、無視を続けます。私より後からきたお客さんの注文を受け、のんびり世間話をしたりしています。

たまらなく、みじめでした。

祖母を助けてあげたいのに、それができないことは、本当につらいことでした。

早く大きくなりたいと思いました。

力が欲しいと思いました。子どもな

んて、もうイヤだと思いました。

とにかく、時間をかけられません。

その時、私は、１つのアイデアを思いつきます。

私は地面を蹴って、走り出します。全速力で走って、椎名町駅にむかいました。むかう先は「サミット」です。

「サミット」で無事、買い物をすると、ほっとするあまり、また涙が出てきました。

帰り道、証拠隠滅のために、「サミット」の紙袋をこまかくちぎってポケットにおさめます（当時、スーパーの袋はビニールではなく紙袋でした）。

祖母には、「第一マーケット」で買い物をしているフリをしていましたが、こうして私は「サミット」の常連になったのでした。

「サミット」に行くたび、レジの仕組みに感動し、「なんてすごいんだろう。これを考えた人は天才だ。そして、弱い人の気持ちが分かる優しい人なんだ」と思いました。

誰もが同じように買い物できるシステムです。待っている順番通りに会計してもらえるのは、永遠に待たされていた私にとって、驚くべきことでした。平等です。

お金持ちでも貧乏でも！　おとなでも子どもでも！　障害があっても！　日本語が不自由な外国の人でも！　誰一人として差別されません。

それがあたりまえの今は、本当に良い時代だと思います。

誤解をおそれずいいますが、人間レベルの話としても、昔は道徳教育が行き届いていないおとなが多かったように思います。

あくまでも私の印象ですが、今の時代だったら絶対に許されない差別的な言動を、大のおとながするのを、子ども時代に、うんざりするほどたくさん見てきました。

「昔の人はみな、立派だった」、「昔の人は、心が豊かだった」などと、どうか思わないでください。それは幻想です。

これからの時代を生きる人は、それにふさわしいだけの知性を身につけていると私は信じます。若い方には、胸をはって生きてほしいと思うのです。

（江口　彩子）

◆ピアノ発表会では、ご協力をありがとうございました

８月４日から４日間にわたっておこなわれた「ピアノ発表会」が、無事、終わりました。

例年通り、暑い日々でしたが、大勢の方に足をお運びいただくことができました。大きな事故もなく、無事にすべての日程を終えることができましたのは、生徒さんやご家族のみなさまの、惜しみないご協力があってのことでした。本当にありがとうございました。

今年、特に嬉しかったことは、お申し込みくださった生徒さんが、全員、ご出演になれたことです。ご病気やおケガで、急にご出演がかなわなくなってしまった生徒さんが、お一人もいらっしゃらなかった、ということです。私の記憶にあるかぎり、こんなことははじめてのことです。

幸運が大きいとは思いますが、生徒さんご自身やご家族のみなさまが、発表会にそなえて、気をつけてお過ごしくださったおかげでもあると思っています。心から感謝しています。

しかし、お熱があったのをお薬で下げて出演してくださった生徒さんもいらっしゃいましたし、お指をケガし、負担のない曲に急きょ変更して出演してくださった生徒さんもいらっしゃいました。

学校行事の翌日、あるいは塾からその足で、等、忙しい日程の中で、がんばってご出演くださった生徒さんも、本当にたくさんいらっしゃいました。

がんばらなかった方は一人もいません。お一人お一人に、発表会までの大きなストーリーがあったことでしょう。

生徒さんお一人お一人のがんばりは、金メダルに値すると感じ、今年、オリジナル金メダルを作成し、ご出演の生徒さん全員にお渡ししました。金メダルは、ご努力の証です。ぜひピアノのそばにかざって、あの日の雄姿を思い出してください。来年以降も、毎年、デザインを変えて、発行する予定です。ぜひ集めてください。

レッスンはすでにスタートしていますが、スタッフも、新しいスタートを切るような心境でおります。次のチャレンジに向けて、ともにかんばりましょう。引き続き、全力で指導にあたらせていただきます。

２０１８年１月、２月には、「ピアノ・トライ」をおこないます（次号で、くわしくお知らせします)。３月には、客員教授であるプリドノフ先生ご夫妻が来日され、プライベートレッスンをおこないます。

来年の「ピアノ発表会」は、２０１８年８月３日、４日、５日、６日の４日間です。場所は、今年と同じ「アクトホール」です。

１つ１つの経験が、生徒さんの成長の糧です。発表会で大きな成長を遂げた生徒さんが、これからさらに飛躍されることを確信しています。

◆「音楽の集い」を開きます

文化の日は毎年、“音楽を愛する人が集う日”と決めています。今年も１１月３日（祝）に、「音楽の集い」を開きます。

「音楽の集い」は、おとなの方の発表会です。会場は「ひびきホール」です。時間等、詳細は、教室内のポスターをご覧ください。

一音会でレッスンをお受けになっている方だけでなく、一音会にお通いの生徒さんのご家族の方も、ご出演可能です。基本的にはピアノの発表会ですが、歌や他の楽器でもご参加いただけます。もちろん、連弾、アンサンブル、合唱も、大歓迎です。伴奏者が必要であれば、スタッフが伴奏いたしますので、ご遠慮なく本部までご相談ください【本部：03-5966-7711（担当：森田・谷口)】。

演奏される方は参加費として、６５００円をご負担いただきます。(映像希望の場合はDVD１０８０円、Blu－ray１５８０円を追加でご負担ください)。聴きにいらっしゃる方に関しては、入場無料です。お気軽に足をお運びください。

◆客員教授プリドノフ先生ご夫妻が来日します

３月に、客員教授のプリドノフ先生ご夫妻が来日されます。

プライベートレッスンの後、２台ピアノによるコンサート、「ジュニアコンサート・オーディション」という流れです。

コンサートの日は、ぜひご予定をあけておいてください。

レッスン：２０１８年3月１５日（木）・１６日（金）
コンサート：３月１８日（日）
ジュニアコンサート・オーディション：３月２１日（祝）

レッスンは、五線読譜が完成した生徒さんなら、どなたでも受けることができま

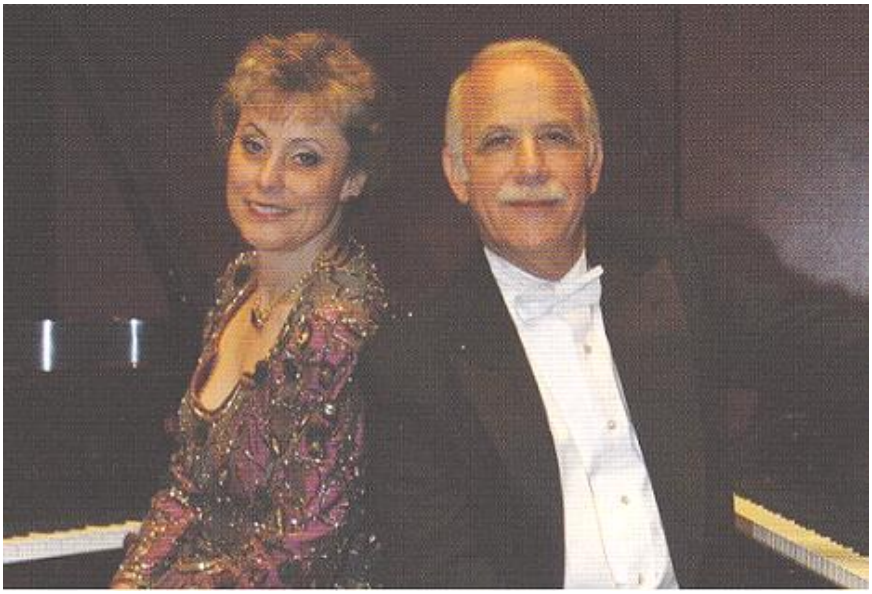
す。決して、大きな生徒さんや特に上手な生徒さんだけのためのものではありません。過去には、未就学の生徒さんが、レッスンを受けてくださったことも、多くあります。

プリドノフ先生ご夫妻は、アメリカのシンシナティ大学で長年、指導にあたってきました。今も、先生方の指導を受けるために、世界中からピアニストの卵が集まっています。日本にいながら、世界のトップレベルのレッスンを受ける、またとない機会です。お一人でも多くの生徒さんが、この機会を生かせますようにと、願っています。

担当の先生と相談して、ぜひ準備をすすめてください。ご不明の点やお迷いの点がおありでしたら、お気軽に本部にご相談ください【本部：03-5966-7711（担当・谷口）】。

30 分レッスン‥‥レッスン料（10000 円）＋通訳（1600 円）→　11600 円
45 分レッスン‥‥レッスン料（15000 円）＋通訳（2500 円）→　17500 円
60 分レッスン‥‥レッスン料（20000 円）＋通訳（3300 円）→　23300 円

オーディションは、現在小学校３年生以上から高校２年生の生徒さんにかぎらせていただきます。日程が近くなりましたら、くわしい要項をお知らせいたします。



◆一音会卒業生、藤田真央くんが「クララ・ハスキル国際ピアノコンクール」で優勝しました

２０１７年８月、スイスでおこなわれた、「第２７回クララ・ハスキル国際ピアノコンクール」で、藤田真央くん（現在、東京音楽大学１年生）が優勝しました。

「クララ・ハスキル国際ピアノコンクール」は、ヨーロッパの若手ピアニストの登竜門としてたいへん有名であり、権威あるコンクールです。日本人の入賞者としては、藤田くんが３人目となります。

藤田くんは、２歳から一音会に通われ、リトミック、絶対音感、ピアノのレッスンを長年、受け続けてきました。プリドノフ先生ご夫妻のレッスンも、受けています。

卒業生のご活躍は、嬉しいものです。一音会はいつも、卒業生のみなさんのご活躍を応援しています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊スクールの生徒さんのご質問を、以下の２つの方法で受け付けています。

メール：1000@ichionkai.co.jp　　電　話：03-3954-9999

＊お電話での質問時間は、毎週月曜日の午後７時～9 時です。ただしレッスンがお休みの日は、質問もお休みとさせていただきます。（今年度より、月曜日の夜に行なっております。よろしくお願いいたします）

＊ご質問は、お一人でも多くの方のご質問にお答えするために、お１人 10 分を目安とさせていただいています。ご了承ください